

昭和三十六年七月二十五日第三種郵便物認可  
（毎月一回・十五日発行）

（通第一五〇号）

# 慈光

第十三卷 第九号

目 次  
教行信証『信卷』講話（五）……………近角常観（2）

悪人成仏の悲願……………花田正夫（7）

善財童子の求道……………福島政雄（10）

心と真実……………佐藤強三郎（13）

文類正信偈俗解……………三瓶徳英作（19）

# 聖徳太子の御法語

我が大王のたまひけらく。

『世間は虚仮なり、唯仏のみ是れ真なり』

(註) 太子亡きあと、太子を偲ばれる余り、御妃、橘姫が

天寿国曼陀羅を造られ、その銘文にある法語。太子が

御家庭にあつて、常に練りかえされた御持言である。

先王、薨じたまわんとせしとき、諸の子等に謂いて曰く

『諸の悪を作す莫れ、諸の善を奉行せよ』

(註) 太子の御子、山背大兄王子の聞きとられたもの。

『財物は亡び易くして永く保つ可らず。ただ三宝の法は絶えずして永く伝うべし』

(註) 太子の甥、田村皇子に与えられた言葉である。

以上は太子の側近に侍していられた、妃、子、甥、にあたられる方々の心の底に、自然にのこされた、太子の法語であり、御遺訓である。

第一の「世間虚仮、唯仏是真」の御言葉は、涅槃經に一句づつ別々に、ある由であるが、太子が始めて二句一連に仰せになつたもので、全く太子の仏意に徹せられた法味の流滴である。後に親鸞聖人が「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもて、そらごとたわごと、

聚 墨 生

## 「教行信証」信巻講話

(五)

### 願成就文釈

#### 一、専念は即是れ一行

『宗師の恵念と云えるは即是れ一行なり。専心と云えるは、即是れ一心なり。然れば願成就の一念は、即是れ専心即是れ深心なり。深心即是深信なり。深信即是堅固深信なり。堅固深信即是れ決定心なり。決定心即是れ無上上心なり。無上上心即是真心なり。真心即是れ相続心なり。相続心即是れ淳心なり。淳心即是れ憶念なり。憶念即是れ真実の一心なり。真実の一心即是れ大慶喜心なり。大慶喜心即是れ真実信心なり。真実信心即是れ金剛心なり。金剛心即是れ願作仏心なり。願作仏心即是れ度衆生心なり。度衆生心即是れ衆生を撰取して安樂浄土に生ぜしむる心なり。是の心は大菩提心なり。是の心即是れ大慈悲心なり。是の心即是無量光明慧に由つて生ずるが故に、願海平等なるが故に発心等し、発心等しきが故に道等し、道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は是れ仏道の正因なるが故に』

### 近 角 常 觀

当講話も次第に進み、前々席来は「聞と言は、衆生仏願の生起本末を聞きて疑心有ること無し」の御言葉につき、真の仏の遺る瀬なき仰せを聞得したる味をお話したのである。今席只今拝読の処は、其の私共頂きたる信心を、三国の祖師方が種々なる言葉を用いて讃歎なされた。其の祖師方讃歎の御言葉をここに集めて来て、繰返し／＼信心の妙味をお喜びなされたのである。所謂古来「広転釈」と申し「即是れ」の語を幾つも重ねて、お喜びある処であります。而して斯く幾つもの言葉でお慶びの処なれば、以下直にその一一のお言葉につき、頂かせて貰おうと思ひます初に

『宗祖の専念と云えるは、即是れ一行なり。専心と云えるは、即是れ一心なり』  
宗祖は善導大師であります。善導大師が専心専念の仰せに

就きては、すでに前席の処に於て、

光明寺和尚は一心専念と云い、又専心専念と云えり。

とのお言葉が仰せられてある。今はそのお言葉を承けて、大師が、一心専念弥陀名号と言われた専念は、専ら念仏ばかりということである。他の如何なるものも雜じらぬ、念仏ばかりということ故、「即ち是れ一行である」。唯南無阿弥陀仏の一つだとの仰せであります。

処でこの念仏ばかりという味は、再々言う如く、こちらから「南無阿弥陀仏の一である。余へ心を向けるでない」と、此方から仏に向うことではなくして、仏より私に「もうこの親の手織りだけである。外のものが間に合う汝ではないぞ」

と、親より手織をこしらえ、与えて下されたところの御心である。こはもつと平たく言うと、仏より私へ言うて下さるには

「汝人生に於いて、種々の望みもあろう。或は自分の境遇をこうもしたい、ああもしたい。又人からもこうくして欲しいと、様々の望みも出るであろう。……即ちもつと上等の着物を欲しいと思うであろう。けれども親の目より見る時は、それは皆迷いである。何の役にもたたぬ。汝如き乱暴者は、忽ち破り、よこしてしまふにきまつている。故にその汝のためには、もうこの親の手織りばかりであるぞ

いに御帰り下さる方があつてはならぬ。幸にこの会期中にそれぞれ気づいて頂く処がなくては、何程人数多くお集り下されても詮なきことと感ずる次第であります。

## 二、お助けが此方の積りでは 何もならぬ。

そこで今の一行の味いは、もつと人生的に言いますと、私共人生を日常どう考えて居るかといひますに、

「自分はこれ程善い事をして居る。これほど人にも親切を尽くしている。人も少し善くしてくれそうなものだ」

「何うかも少し善い具合に成りそうなものだ。思うようにならぬのでこまる」

と始終取つたり措いたり、何時までも問題が切れるというところがなくて、苦に苦を重ねているのが私共の現状であります。私共が始終他に對しても「済む済まぬ」の考の止まらぬのはみなこれから出てくるのである。

ところで私共の気では、これに對してどう思うて居るかというに、「だから自分の方より何処までも善くしてやり遂げんならぬ、飽くまで奮闘して成し遂げんならん」と、総て何処までも我が手で解決して行こうという腹で居る。ために何時までも問題が解けるといふ時がなくて、銘々苦を重ねて居るのであります。

とここで今、それに対する仏の仰せはどうかというに、……ここでみんなが仏の仰せを聞こうとしないで直ぐ「仏

この手織り一枚は、そのため親が長々の辛苦、苦勞でこさえあげた着物故、どうかこればかりは受けて呉れよ」

と、斯く親より言うて下さる御心であります。

私はここ二三席はこの事ばかりを申し立てている。今またこれを言うは、既に皆さんが充分お頂き下されたこととは思いませんけれども、若し中に、自分は頂いた積りでも、まだ本当に頂けて無い方があつてはならぬ。故に人生、信仰の問題に於いて、若し何処か一点でも不安の処がある方は、今この話で安心を得て頂きたいと思つて申すのである。

折角二週間の会を開かして貰うても、誰それが『信巻』を講義しただけに終つては何もならぬのである。どうか一応の講義と聞かれずに、飽くまで御一人々々に充分仏の御真意を得て頂き度いと思つてあります。

実は昨夜も談話会後、遠方より御上京下された方と夜遅くまで話し、二時になるまでも皆さんが非常の熱心でお聞き下され、私も我を忘れて夜更くるまで御話申したのである。而して皆さんが久しく聴かれた上にもなおどこか不安を感じらるる様を目のあたり見せて貰い、又飽くまで聴かんとなさるる皆様の御熱心に深く感じさせて貰うたのである。で、かく一人一人の大事の問題故、まだ充分の御安心のない方は勿論のこと、御自身は左程に思つてお出でなくとも、折角御来聴下されながら、本當の処を攫まらずじま

はこうく言うて下さるのだ」と、自分ごしらえに仏の御言葉を直ぐもつて来て、蓋をするという風になり易い故、ここをよく気をつけなくてはならぬ。

先達もお出で下されたのでありますが、衆議院に出て居らるる土井氏と申す方は、久しい間喜んでお出での方であつた。久しく喜んで居られたのであるが、さき頃病氣に罹られて、弥々手術台に上らなくてはならぬことになつて来た。上る時は極めて安心して上られたのであるが、下りたらサア恐ろしくしてしよるがない。今まで、お助け／＼と喜んで居られたのは、実は自分ごしらえの、こちらの積りに過ぎなかつたのである。

故にいよ／＼助からぬかも知れぬとなつたら、サア俄に恐しくて／＼仕様かない。東京に出て見えて、私の所にお出で下されたのであります。これが何かというに、即ち今迄久しく聞いて居られたのであるけれども、それが唯何時死んでもお助けという自分決定の安心に過ぎなかつたからである。

世間でも「あなたは親切な方と申すています」といふは、真に先方の親切の受けられた者の言ではない。故にそう思うてるものの、弥々自分の身に火がついて来ると、果してどうかとなつてくる。即ち平日無事な時は、死は仮定で言つてよかつたのであるけれども、弥々と行き詰つたら、忽ちグラ／＼と今までの安心が砕けてしまつたのである。

お出で下されて言われるには「自分はもう何程お助けと  
思うても、安心がならぬ様になつて来た」という御尋  
ねであつたのであります。してその御様子が一通りでない  
私は申したのである。「今まであなたはお助け／＼と喜  
んで居られたのであるけれども、親はきつと自分を思うて  
くれるに違いないと、自分でそう思うて安心して居るのと  
此方は何も思うても居やせぬのに、親の方は思いがけなく  
此方を心配して下されてあつたのと何うであるか。貴方の  
は、今迄、親は思うて下さると、そう貴方の方で思うて  
おいでになつたのである。けれども今真実の親の慈悲は、  
此方に於いてそう思うことではない。

現にこちらはかく「親は思うて、下さるのか」位に、平  
氣に横着な頂きようをしている。その様を御覧になる仏は  
「ああ浮か／＼した聞きよをして居るが」と、即ち今貴  
方が死ぬと思つと恐ろしいと言われるそこである。その頼  
りなき哀れなる貴方の様が可哀相で捨てられぬとある。  
親のお慈悲はこゝ所なのである。今迄貴方は、下関  
まで行くと門司に渡る船があると思つて安心して居られた  
のである。そこまで行つても船が無つたため、貴方は困つ  
ておいでになるのである。

処が、何ぞ知らん、そのどこまで行つても／＼船の無い  
貴方であることを、仏かねてしらしめし

私は申したのである。「私だとして矢張り同じである。死  
んだ先がどうなるか、それは私にも分らぬ。鉄橋で枕木の  
間から海を眺めるのと同じ恐しさであるけれども、その中  
に、唯一つ、私の襟上をつかんで墮さぬとあるお慈悲の御  
一言である。この頼りなき身を、こうまで仰言つて下さる  
お慈悲の御一言と承われば、

親鸞におきてはただ念仏して弥陀に去けられまいらすべ  
しと、よき人の仰せをこうぶりて信ずる外に別の仔細な  
きなり。

今迄、貴方は自分の座つて居る床は、確かだと思つて居ら  
れたのである。けれども一旦その床が眼に見えて壊されて  
来たらしうがない。大地に嚙り着いて居てもする／＼墮  
ちて行くに困つて居られるのである。然るに今、そういう  
貴方を、疾うから墮とさぬというて下さるお慈悲の仰せで  
はないか」と。こう申した一言にこの御老人は御安心をな  
されたのであります。

それ故、先達の談話会にも、あすこまで苦心の道行きに  
ついては話されたのであるけれど、いよ／＼安心の処にな  
つたら、何処で安心を得られたか、殆んど分らぬ程にあつ  
た。即ち信心は向う様の仰せを頂く処で、初めて得させて  
貰われる。

それをみんなが肝腎の仰せの方は聞こうとしないで、

生死の苦海ほとりなし、

ひさしくしずめるわれらをば、

弥陀弘誓の船のみぞ、

のせてかならず渡しける。

汝、死ぬと思えば先は真暗で分らぬであろう。死後どう  
なることか。それは貴方にも私にも分らぬ。がここに仏よ  
り直々の仰せには、……即ち釈尊の御説き下された処は  
仏直々の仰せである。

その仰せには、その苦の海に漂うて居る汝が真に可哀  
相で見殺しにされぬのである。その汝故、我の方から待ち  
受けるとある広大の仰せなのである。

それを今まで貴方は、この向う様の御声の方は聞こうと  
しないで、自分の方より勝手に「仏はこう／＼」とひとり  
よがり喜んで居られたのであるが、今いよ／＼自分の行  
く手が真暗となれば、そういう浮か／＼して居る奴故あわれ  
み見捨てないとする、このお言葉を頂く外無いではない  
か」と、かように私は申したのである。その言下に、今の  
方は、ほろ／＼と涙を流して御安心下されたのであります

### 三、大悲の仰せを聞く

又こは初席からいう大原老人にしても同じである。京都  
で私の宿に訪ねて来られて「どうしても未来の安心が出来  
ぬで困る」というお尋ねであつた。

「あ、頂いてる。こう思う」

と。これではいつまでたつても頂かれる筈がない。

これでは何処までいつても、結局自分の積りというだけ  
に過ぎぬのである。処が実際はこういう状態で居て、自分  
では頂けた積りで居る人が少くないのである。故にそうい  
う方は今この席で、仏の広大なるおこころは、こちらが現  
にそういう頂いた根性で居る。それを仏より御覧じて

「その出来た根性で居るのがあふなくて／＼仕様がな  
いのである。その心得た根性で居るのが可哀相で捨て置けぬの  
である」

とある広大の御まことなることに氣をつけて、今までの  
方角を一転し、真の仏のお心をよく頂いて欲しいのであり  
ます。

そこで今言う如くに、南無阿弥陀仏一行ということば、  
此方から「お念仏ばかり」ときめることで無い。仏より、  
「汝、財産、智慧、家族、健康、種々あてにならざる物を  
あてにし、済むすまぬと暮して居るのであるが、そんなも  
のは一つとして当てになることでない。その頼りのなきし  
て見ようのない汝故、我は疾くより捨てぬというて居るの  
である。故に汝のためにはもうこの吾が親心ばかりである  
故、どうかこれ一つは受けて呉れ」

とある親様よりの御仰せなのである。私共一人々に親様  
は斯く直々言うて下さるのであります。

そこで私共、この仰せであることに一念気づかして貰うと、ここで初めて

「親鸞におきては唯念仏して弥陀に去けられまいらすべしと、よき人の仰せをこうぶりに信するほかに別の仔細なきなり」

である。即ち一度このお心であることを知らして貰うと見ると「成る程、何れの道も絶え果てたる自分の身の上で

## 悪人成仏の悲題

花田正夫

法然聖人の御在世の時でありました。あらゆる悪事をしながら妻子を養うていた耳四郎と云う盜賊が居りました。

或夜白河の御坊にしのびこんで、一仕事しようと床下に入つて耳をすますと、御弟子を前に法然聖人の御法談がきこえる、じつと耳を傾けると、如何なる悪人、如何なる悪人も撰撰本願の不思議なお力で必ず救われるとのことでありました。この一句がどうしたことか耳四郎の耳に入つて心を打つた。

盗みに入りながら盗みを忘れて御坊の床の下で一夜を明

あつたのである。爾るをこれをお見捨てない思し立ちとは如何なるお慈悲の御不思議ぞ」と。最早かく頂く喜びの外に何物もなくなつてくる。即ちかく頂いた信心の有様が、次の専心である。一心である。故に次には大師が専心と言われたは、この頂いた一心の様であるとお知らせであります。

かし、夜明けと共に、聖人にお目通りを乞うた。お弟子方には耳四郎と聞いて気色ばむ者もあつたでありましようが聖人はその由を聞きとられると、左右なく引見されたのであります。

さて聖人の御前に進み出た耳四郎は以外のことを申し上げたのであります。即ち昨夜来の顛末をあげすけに申し述べると共に、

「私如き極悪非道の者も、本当に救うて下さるのでありますしうか」

と。然しこれをきかれた聖人は、恐らくは両眼に涙を浮べられて

「昨夜の法談は、お前一人がわが身のこととして聞きとつてくれた。不思議なことよ、有難いことよ」

と、耳四郎の全体を、念仏の願海の中に撰撰とられたことでありましよう。

耳四郎はかくて念仏の人となりました。このことはまことに著しいことでありまして、覚如上人も、これを伝え、「さればかえすが、浄土宗の正意は機の善悪に目をかけて、仏の撰、不撰をおもんばかることなかれ」と結ばれています。

ここで耳四郎の心事に立ち入つて見ますに、日々悪業の中に妻子を養いながら、彼にして見れば、誰一人として自分を嫌わぬ者もなく、呆れ、おそれぬ者としてはない、目をかけて下さる人は誰もいない、三界孤独の生活でありますそこへ、勿論聞法のためにでもなく、またそういう心さえない身でありながら、悪事を働くために法然聖人に近づいたのであります。ところが思いもかけず、三界孤独の極悪人を、かねてみそなわし、救いとげんとかかりはてて下さる方を知らされたのであります。

昔から「虚に出でて、実に帰る」と申しますが、耳四郎の

上に、悪事が縁となつて、仏法を耳にし、その念仏が生涯を貫くことになつたのであります。

さて、この著しい事実を聞いて、誰しも感心するのであります。多くの場合、この耳四郎を別人扱いするのであります。

或は、耳四郎程の悪業を持つから本願をよるこんだのだとか、悪人というものは善にも強いものだ、とか、種々に思い勝ちであります。そういうものではありません。

耳四郎も八万四千の煩惱具足の凡夫であり、私共もその通りで、寸分の相違ありません。唯業縁の有無によつて別人のように思われるだけですが、罪悪の免疫性を持たぬ私共は、「さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべしとこそ、親鸞聖人はかねて仰せ候いき」の教通り、業縁次第で狂態、邪態をさらさずには居られないので、自分だけはそんなことは決してしない、などと云えることは一つも無いのであります。

耳四郎こそわがよき手本であります。この耳四郎が念仏成仏申すことは、ひとえに仏力、他力によるのであります。同時に私共のたすかる大先達であり、大善知識であります。

又反対に、耳四郎如き者が念仏申したつて助かるはずが

あるものか。もしそうだとすれば念仏は罪業をごまかす調法な魔術である、と思う人もあるでしょう。

これは、自分の善をたのみ、或は未来の善を予想した者の起し易い思いであります。これというも念仏の絶対善に夜明けをしないからであります。

私は或目のことではありますが、歎仏偈の最初の偈文、

光顔巍巍として威神極りなくまします

かくの如きの燦明、ともに等しきものなし

日・月・摩尼珠光の燦耀も、

みな悉く隠蔽して 猶し聚墨の如し。

を繰り返していました時、フト仏の太光明のもとに、日光も月光も、宝珠光も、皆かくれて光力を失い、墨のあまりと同様になるとの教えに刮目せしめられ、それから私自身に聚墨という名を用いるようになりました。その後、九州の学僧に「猶墨」と名告られているのを講本で見出しこの方もここに驚かれたのだなあと、知己を得た思いがいたしました。

闇夜には螢の光も目立つものでありますが、一度太陽が東天に昇ると、螢はその光力を没して、赤い蛇腹をさらけ出しますように、仏心の太光明にふれる時、耳四郎と寸分たがわぬ我等の姿が知らされ、否むしる耳四郎以上の偽善者と知らされるのであります。

## 善財童子の求道

### 外道の善知識

そこで今度はあらためて善財童子に、善男子よ、この南の方の一つの大きな城があり、薩羅という都で、その中に一人の出家の外道がある。その外道の名前は遍行という名前であります。その人の所に行つて菩薩の道をたずねたらいいでしょうと教えるのであります。今度は外道であります。外道と言うとどうも今日の私共の言葉は大分墮落しておりますから、人を罵る時に外道と言つておりますが、仏教ではそんな意呼では無いのでありまして、仏教以外の道を修めて、修行をしている人という意味で何も悪く言う心持は無いのであります。ただここで私共が感じます事は仏教というものは非常に心の広いものである、つまり外道の道もやつぱり善財童子の善知識を求めるとの大事な所になるので、外道も大事な善知識であるという事になつて、仏教の心の世界が広いという事を此処によくあらわされているかと思つてあります。

そうしますと善財童子は薩羅城というのにまいりまして

池山先生が或日のこと

道成寺、うろこが肌の脱ぎじまい

の句を引用せられて「道成寺物語の最初の頃は、安珍と清姫が共に立派な姿をして愛語をささやくが、一度安珍が身を引かかると、遂に清姫は安珍を追うて、吊り鐘を蛇体となつて三巻き半とりまき、燦を吹きかけるとなつて終つているが、心の奥にひそむ、鱗の肌を見抜かれて、選択の本願、ただ念仏の救いはあらわされて下さつてゐる」と話されました。今にして身にしむことでもあります。

### 近詠

西村 武三

愚か身の愚にもかえれずさかしらにましろの如くふるもうわれは。

内外もみな真闇のその中に喚びかけたまうみ名を頼りて

身の業報いかあらんとも念仏の呆れたまわぬみまことここに我も人も始末のつかぬ此身なりこれ引受よりの稀有なる願い折々に呼び醒まさるるみ名の声昨日も今日も言いしころを斯道を迎らせたまいし足跡ひろい歩みてわれも行くかな 祖師も師も如何に苦惱や多からめみ名を頼りに超えたまいけん

## 福島 政雄

日没時、丁度太陽が西の山に沈む頃にその城中にはいろいろ。その城の東北に妙吉祥山という山がありまして、夜中にその山の頂を見ると、そこに太光明が見える。それが頂を照らすのであります。そこで善財童子はその光明を見まして城を出て山に登る、登りますとその山の上の平らになつてゐる所でこの外道が静かに歩んで散歩をしてゐる。

経行と言ふのは散歩と言つてもよいのでありまして、その外道の姿形がまことに円満でありまして、威光があたりを照すようである。そして非常な吉祥というのでありますから、さいわいの燦が非常に盛に燃えさかる火よりも明らかに見える。そして十千と言う沢山の清らかな行をやつてゐる人々に今の外道がとりまかれてゐるのであります。そうして善財童子の菩薩道をたずねた問いに答えます。

### 様々の姿となりて

私は既に一切の場合に行つて遍く菩薩の行に随順する、従う、そう言うところに心を落ちつけておりますと先ず答えます。そして上の方は天竜王なんかの世界、それから

下の方は地獄・畜生、そういう世界に至るまで一切衆生の中に於いて、種々の方便、智慧・教化・調伏を行つて、そういう衆生を平等に利益して円満な心持に導くのであります。それから種々の技芸、諸々の波羅密、布施持戒忍辱精進というような波羅密、それから發菩提心、それから菩薩の行等を、そういうあらゆる世界の衆生に開き示して、そして仏の身を願うような心をおこさせます。仏の一切智を求めるような心を起こさせます。そして非常ないい方便を持つておつてその自分が導こうとする衆生の形と同じ形をその前に示す、つまり地獄の者に説こうとする時には地獄の姿となつて説くという事でありましょう。そして丁度心に應ずる所に随つて、言葉も向うがわかるような言葉に変えて、教え導くようにします。そして色々そういう差別をしながらまことの道を説きます。あらゆる世界に行つて諸々の衆生の願うところに随つて説き示すのであります。餓鬼に行けば餓鬼の姿になる、地獄に行けば地獄、天に行けば天の姿になる、そして色々の大変なところを示す。そして姿を変えると同時に言葉も相手が解るような言葉を使つて説法をする。こういう風の自由自在の事をします。そして無量の煩惱の垢、穢れの中で、常に煩惱の穢れを持つている衆生と一しよにいるようにしますが、併しその煩惱の穢れに染み着くという事はありません。そういう事を私

方が優れた方であつたと言う事を感じます。そういう風の方が出来る、と云う事になると、實際仏の道を述べ伝えるという事に於いて自由自在の事が出来る。これはまあ私なんかの出来ない事でありまして、どうも私なんか頑迷でありまして、もとが熊本でありますから、熊本の調子の言葉でしかも或る言葉しか私には言えないのであります。色々言葉も自由に使い分けるといふ事は出来ません。東京に何年おりましたも東京の人が使うような言葉はちつとも使えませんでしたのであります、どうも頑迷なのであります。でも出来ればいいという事は思ひますのであります。そこでその外道とはお別れという事になります。一寸休

みます。

### 香の善知識

今の通行外道に教えられまして、やつぱり南の方に一つの国があります。広博、広く博いという名の国であります。その国の中にある村、その名も国の名と同じだといふ事があります。その中に馨香長者、香の事をよく心得ている長者という意味のようであります。そういう長者があつたその名は具足優鉢羅華、優鉢羅華といふのはどんな花か知り

はしております。それだけであります。

### 露伴と言葉

と云うような事ではありますが、なかなか広大な大変な事でありまして、こうなつて来ると私共の力の及ぶところじやないと思ひますものの、併しまあ私共も多少それに似た事を小さい狭い範囲で出来るかも知れない、そういう事が出来るようになりたいといふ事は思ひますのであります。幸田露伴という方は皆様御存じでありまして、あの方の書かれた小説を読みますと、自由自在に色々階級の人々の使う言葉を使つてあります。それからあの方に非常に感心します事は、支那の小説を訳しますのに、一方では支那の小説のもとの言葉を成る可くそのままに生かして使うようにする、そういう訳もあるかと思ひますと、あの支那の六つかしい言葉を全く日本の砕いた言葉になおして訳されている。両方を見ましてこんな事が前来るかと感心致しましたのであります。それに又露伴さんの娘さんのこのごろよくものを書いておられます幸田文さんのお書きになつた何かを見ました時に、「父はあらゆるどんな言葉でも言えるし書けるし、そうだけれども日常の言葉といふものは非常に厳しく、めつたな言葉を使うと父から叱られた」といふ事を言つておられまして、いよいよ露伴といふ

ませんが、よく御経の中に天から降つて来る美しい花の種類がこのうばらけとなつていふようであります。うばらけのような徳を身に具えていふようなそういふ名前があります。そういふ事を教へ示されまして、善財童子はその村へまいりまして遍くその長者を探し求めました。それからいよいよ長者の前にまいります。善財童子はその足を頂礼する、印度の最も丁寧なお辞儀の仕方でありまして、向うの足を押し頂く、仏様を拜む時に押し頂くようにして拜む、そういう風にその足を頂礼して例の通りに菩薩の道を聞くのであります。

そうすると長者は自分は一切の諸々の香をよく知りわかることが出来ます。いかおりの色々香がある、それをよくこれはこうだあ、だといふ事を知りわけるといふ事が出来る。それでもその香といふのが色々あつて、もろもろの病を治す香があり、諸々の悪い事を絶ち切つてしまふ香があります。それから憂い悩みを除く香があり、染愛を生ずる、そういう香もある、それからそれに似たように煩惱を増すといふ香もある、それからその反対で煩惱を滅するといふ香もある、それから諸々の驕り高ぶる心を捨てさせる、そういう香もある、それから法を聞いて歡喜する、まことの道を聞いて非常に喜ぶといふ香もある、それから発心して念仏するといふ風に導く香もある、とそういう風に

色々の香の種類を並べ立てまして、こういう一切の香の事を自分は皆よく知っております。こういう事を先ず述べましてこれから不思議の香の事を物語るのではありません。その香のいちぢく丸、丸の一つは大きなかおりのいい燐のような雲をおこす、こういう香もある。又かおりの雨を降らせてその雨が身につくと体が金色になる、こういうのもある。それから衆生がその香を嗅ぐと七日七夜歡喜充滿する、嬉しくてたまらぬ心に満ち満ちる。それから又その香を体に塗れば火にはいつても焼けないという香もある。法螺貝ほらがいにその香を塗つてその法貝螺を吹くと一切の敵軍が悉く退散す

## 心と眞実

### 第七 仏の子なり

信哉「昔、七百余年前に、法然上人の父上は、人に殺されたのです。その仇かたきを上人が討とうと思われた時に『お互に仇討ちをくり返しては際限がない。お前は出家して自分の菩提を弔つてくれ、決して仇を討つな』と遺言されて、遂に死なれた。それから出家なさつたとの事です。

益々平和をかき乱すばかりになると思う。自分を善として他を悪とし、仇をうたなければ承知出来ない、というところが争の根本である。罪悪の本源である、このことは明かであると思う。どうでしょう。仇を忘れる。……これこそ実に至難のことです。いかに至難であつても、これを解決しなければ眞の平和は来ない。私はこう思いました。どうでしょう。仇を忘れ、その上、互の幸福のために大に努力する」

区長の倅はむつかしい顔をして。

倅「言葉としてはわかる様ですが、その氣になることは……」

と頭をかけた。

信哉「まあ、青年として元気よく、真面目に大いにやつて下さい。よろしかつたら、何時でも御相手いたします」と愉快に笑つた。

倅は心に……信哉さんが家に来る様になつてから可成長い。その間色々の話をずいぶん聞いた……と玩味した。

或る日信哉は、御経本を出し「ここを御覧下さい」とて『他方は本願を信樂し、往定必定なるゆえに、

末灯抄ニ

さらに義なしとなり。しかれば

わがみのわるければ、いかでか如来むかえたまわんとおもうべからず。凡夫はもとより煩惱具足したるゆえ

る。それから又一丸を焼けば七日の間一切の飾の道具を雨降らす。こういう風に香を色々に調和して使う、こう言う事を自分は心得ている。併しそういう事よりも探いものは自分にはわからない。こういう事を言うのであります。これはもう一寸私なんかが体験する事が出来ない事でありませぬけれども、併し香というものの世界に深くはいつたならば今この長者が物語つていられるような世界を感ずるというような事にもなるだろうと言う位に思いますだけであります。そこはあんまり意味を考える事は出来ませぬからそれだけにして頂きます。

## 佐藤強三郎

……これは、五分五分の仇討をやめて、仏道を修行するために出家されたのです。そして浄土宗を開き、自信教人信の祖師となられた。

五分五分思想から解脱する……これが人生問題の眞の解決でしょう。仇を忘れる。……これこそ眞の解決と想う如何に文明が発達しても、財物が豊富にあつても、自分を善とし、他を悪として、鬭争を以て解決せんとすれば

に、わるきものと思ふべし。

また。わがころよければ往生すべしとおもうべからず。自力の御はからいにては、眞実報土へむまるべからず……」

も

建長七才、正卯十月三日。愚禿親鸞八十三書之」

の処を開いて指した。倅は手にとつて、ゆつくりと見たしばらくして信哉を見上げたとき

信哉「私共が、自分はよいから、そのよい心で助かるのだ又悪いから、自分は駄目だ、と卑下して悲観する。これが人生五分五分相對の思想から出てくる当然の考えです。これでは共に眞に解決はないのです。然しありがたいことには本願は無碍なのです。絶対の眞実なのです、あなたも、大分聞いて下さつた話ですが、初め善兵衛さんが……わがころよければ往生すべし……と得意になつていたのです。

ところが捨吉さんのヒドイ仕打に腹を立てて、恨み、なやみ、このままでは地獄行きだ。死んでも死にきれぬ、とよい心が消えて無くなつてしまつたのです。

……こんな自分ぎめのよきころは……人間の五分五分根性から出たものだったのです。有碍だったのです。後で善兵衛さんは、自分の様な虚栄心の強い、名利心の盛んな、不純な者は駄目だ。こんな偽善者である自分の腹の中を見抜かれたならば、誰も呆れて、相手にしてく



れるものはないだろう。それはたしかにそうだ。自分はこんな馬鹿な一生を送るのか。実につまらぬ一生であった。我慢な奴だつたなあ……と歎いたので。

これは……

わが身のわるければ、いかで如来はむかえたまわん……と、自分できめて卑下しているのです。これは人間の五分分根性から出たもので、やはり有碍の心だつたのです。仏を疑いへだてて居るのです。

よくしても遂には苦しみ、悪ければ苦しむ。それでは、一体自分はどうすれば良いのか。この様であればこそ、この苦悩のわれ／＼を哀んで、五分五分離れた無限の慈悲があらわれて下さつたのです。

善人は善をひるがえし、悪人は悪を忘れて、絶対のお慈悲に入るのです。

涅槃経の中に

「諸々の衆生は、皆是れ如来の子なり」

とあります。無限の親の慈悲を聞けば、善い子も善を誇ることを止め、悪るい子はひがみと遠慮をすてて、何時でも、何処からでも躊躇なく、親のいます、楽しい家庭へ飛んで帰れるでしょう。善し悪し言わぬ、温い心の処へは皆集ります。そしてみんなして、心のへだてなく、楽しく暮すことが出来る。

真の目的が達せられるものであると思います。

他人から見えて貧しいと思わるる家庭に於いても、平和、幸福の家庭があり、金持ちと見える家にも意外の不和や闘争がある事がある。

青年は理想を追うて堂々と生きましょう。いく度失敗しても、立上り、くじけず、あきらめず、どこまでも誠実をつくして生きましょう、進みましょう。

絶対の慈愛と真実こそは真に人生に、平和をもたらしむる根元があることを確信して生きましょう。

真の宗教の姿は、叡智が働いていて迷信的でない。懺悔の心を生ぜしめ、感恩報謝の念を起し、一心一向である」

と語つた。

区長はある夜、信哉を訪ねて一人で来た。

区長「あの話はどうでしょう。何とか解決を早くつけたいと思うのですが」

信哉「仲々むつかしい。何としても貴方の倅さんの考えが中心とならなければなりませんからね。倅さんの心さえ円満に行けば、すべてすらくと自然に解決しましょう。然し、根本的に区長、あなたの決心は動かぬでしょう。変らぬでしょう。もうすこし様子を見ましょう」

区長「はい変りません。よろしく」

いかなる善人も、悪人も、外国人も日本人も『如来の子』たる点に於いては、全く同等である。平等である、如来の方からは全くへだてがないのです。

善兵衛さんも捨吉さんも、如来様に善悪をとられて、仲良くなつたのですね……」

と信哉は語つた。

区長の倅はまた訪ねて来た。

信哉「昔から幾百億万の人間が『平和』ということを実現させようと考えて来た。そして物質を平均に分配して平和にしよう、ということが最も易い事です。又人格を認めて、公平の扱いをしてやろうとしています。又心の方面から真の平和を現出させようというものもあります。慈善事業というものが各国にあります。これは困っている者を先に救つてやろう。慰めようと云う趣旨です。これは小さくともこの相對、五分五分人生に於いて、これこそ、真に平和を実現させる、本質的、根本的施策であると思う。これは五分五分を離れた仕事です。ところがこの尊い事業も結局は物質的待遇の改善以上に手が及ばないので、この恩恵を受けた人々も仲々真に平和の心を持つことが出来ない、という話です。

これは当然の事と思う。物ばかりでは真の平和は実現出来ない。どうしても心の解決、心の平和に於いてのみ、

信哉「後の様子は時々知らして下さい。私は旅に出ますから……」

と云つて、その翌日旅に出た。

## 第八 倅の立聞き

四ヶ月位経つたある日、区長から信哉へ手紙が届いた。

それには、

「家の分家の倅も年頃になつた。嫁の話が出て、そして本家（区長）にも年頃の娘もいるが、敷居が高くて貰いたいという話も、出せないでいる。と本人が迷っているようだ。

註に、私共本家、分家も血族結婚にはなりません。三代以上も経つていますから……」

という意味が、こま／＼と書いてある。信哉は考えていたが、決心した。区長へ「アヌク」と電報した。

信哉は区長の家へ日暮れ方着いた。その夜区長に

「あなたの決意はどうですか。遺言の通りやる積りですか」

と聞けば、区長は「はい」と頷く。

信哉「あなたが、自分の倅へあの話を出しても、倅が承知しなかつたら、どうしますか」

区長「倅が承知しなくとも、私は良心の命ずる通り、私が

横領した額に相当する家産の三分の一は、どうしても分家へ返してやります。返しても尚すまぬのです」

信哉「倅さんと家庭が治まらず、どうしても争いがやまなかつたら、どうしますか」

区长「私は最初、横領した時に、天にも地にも誰にも知らせず、一人でやつたのですから、争の源は私に非があるのです。種私が蒔いたのです。一人でやつた罪は一人で一切負うのが当然です」

信哉「倅が承知せず、家から追い出そうとしたらどうしますか」

区长「そうされるのも決して無理はないと思う。私は先祖から残してくれた財産を無くしはしなかつたが、家の名譽は全く無くしたのです。無くしたばかりでなく、泥を塗つたのです。どんな目に合わされようと当然です。

……この様に、天地に容れられない罪人をどこまでも哀れんで、御見捨てない温かいお慈悲に浴して居るのです。ありがたい。……然しこの世の処罰を受けるのは当然です。私の決心は変わりません」

信哉も区长も真剣である。何事を忘れ、どんな音さえも耳に入らぬ風である。まるで抜き放つた刀をもつて、チョウチョウハッシと渡り合うばかりである。

が重いのです」

信哉「家を出て生活は……」

区长「生活は出来るでしょう。出来なくてもそれが当然なのです。いつ死んでも、どこで死んでもあたり前なのです。今迄が勿体なかつたのです。死んだ気で生きて行きましょう。仰せを仰いで……」

この時区长は、心に思い出した。死に様はよし如何あらんとも凡夫われ唯御仏の誓いにまかせて

あ、唯御仏の誓、この外に何があてにならう。悪い者は世に容れられぬ。そして自分は悪い者ではないか。どんな死に方をするかも知れぬ。然しこれも自分の宿業である。こんな者を救わずんばおかぬとの強い御誓いにひかれて行く。と、くり返し、くり返し考えた。

話とぎれて、二人とも物思いに沈んでいた。信哉は区长の様子をじつと見ている。区长は考えこんでいる。……やがて信哉は

「それじゃ、財産の三分の一は分家へ……」

区长は口を結び、眼を据えて信哉を見、頭をコクンと下げた。

信哉は涙ぐんだ。ハラハラと涙が……。しばらくして

区长の倅は、今夕信哉が着いた時から、何事ならんと氣を廻して、二人の行動を見ていた。四ヶ月程前に旅に出た信哉から、又急に電報が来た。家に着くや親爺と二人で話し込んでいた。これには何か変つたことがあると深く心に感じたのである。それで二人の会話は障子の外でこっそり皆聞いていた。

信哉「倅がどうしても、家に置かぬと言ひ張つたらどうしますか」

区长「私倅にはあやまります。先祖の相続人として私の子ですけれども、魂が続いているのです。先代のあの立派なる精神が、身の内に続いているのです。その立派なる精神の前にあやまるのです。切角何代も続いて来た、立派なる精神を私が踏みにじつたのです。

自分の子だけに謝るのではありません。正義に、真実にあやまるのです。倅に謝つて、隠居して家に置いてくれと頼みます」

信哉「それでも、どうしても家に置かぬと云うたら」

区长「私は家を出ます。元々私は刑務所へ入れられるべき人間なのです。それが無事にこうして、立派な社会に置いて貰つたのですから、これだけでも喜ばなくてはならぬ境遇だつたのです。世間を誤間かして来たのです。罪

区长「嫁の事は」ときいた。

信哉「私は嫁の話と財産贈与の話とを一緒に出すのを非常に警戒したのです。それは区长の方で嫁をやるのだから財産はまけてくれ、という氣持を起しはしないかと、案じたのです」

区长「分かりました。嫁の話は、財産贈与の方がきまりが着いてから、改めて出しましょう。それから……」と語を次いだ。

### 第九 自然の解決

そこへ突然、区长の倅が障子を開けて入つて来た。二人ははつとした。信哉は倅を見た。倅は何事か決心している様子である。

倅「失礼ですが、昨日から、只事でないと思ひ申訳ないことですが、蔭で話は聞きました。何事もお父さんの考えるようにして下さい。世の中には、借金を残して行く親もあるのです。一文なしの徒手空拳から立ち上るのが多いのです。私もやります。……」

この話は私か一切万事責任を負うてやりますから、誰にも話さずに置いて下さい。善兵衛など、親類始め、誰にもきかさずに置きたい。相手の分家の倅にも聞かせたくない。いつかあの倅とも話の出来る時が来るでしょう。

それまで待ちたいと思います。  
 仏様から見て貰えばありがたい。  
 分家の倅も、仏様御一人を相手にしてくれる様になれば話も出来るでしょう。そうなればもう話をする必要もなくなるが……」  
 その時、親爺は、あの話の書いてある「遺言状」をもつて来て倅に見せた。倅は見て  
 「わかりました。もういりません。私がこの通りやりま  
 す。」  
 と言つて囲炉で焼いてしまつた。

## 文類正信偈俗解

### 三 瓶 徳 英

信哉と区長は顔を見合せて、正しく眼を合わせた。  
 区長「ありがたい」と、誰に言うともなく頭を下げた。  
 それから間もなく信哉は旅に出た。後で聞けば、区長は娘を分家の倅にやり、沢山の財産を持つて行かせたとの事、両家も仲良く交際を続け、持に倅と倅とが睦ましくなつて行つたとの事である。区長から信哉へ手紙が届いた。それには倅が遺言以上の事をしてくれました、とよるこんであつた。区長は時々仏壇へお参りした。何時の間にか倅も後に来ておまいりして出て行くことがよくあつた。

### 念 仏 正 信 偈

総 標 (念仏の体)

西方不思議尊 西方浄土の阿弥陀尊

### 依 經 段

### 彌 陀 章

△ 因 相 果 徳  
 法蔵菩薩因位中 法蔵菩薩の御時に  
 超発殊勝本弘誓 殊に勝れし御ちかい  
 建立無上大悲願 無上大悲の願をたて  
 思惟摄取経五劫 五劫思惟に酬いたる  
 菩提妙果酬上願 阿弥陀ほとけとなりたまひ

満是本誓歴十劫 十却已来お喚びすめ  
 寿命延長莫能量 寿命は長く限りなく  
 慈悲深遠如虚空 慈悲心広くすべて容れ  
 智慧円満如巨海 智慧はまどかに充ち満てり  
 清浄微妙無辺刹 妙なるみ国浄らかに  
 广大莊嚴等具足 莊嚴かくる所なく  
 種々功德悉成満 種々の功德は満ち足りて  
 超逾十方諸仏国 あらゆる国に超えたり  
 △ 光 明 名 号 徳  
 普放難思無碍光 不思議の光り放ちては  
 能破無明大夜闇 無明の闇をてらします  
 智光明朗開慧眼 智慧のまなこは朗かに  
 名声靡不聞十方 御名十方に響くなり  
 △ 廻 施 大 信 徳  
 如来功德唯仏知 如来の功德限りなく  
 集仏法蔵施凡愚 凡愚に恵施し給うなり  
 弥陀仏日普照耀 慈悲の光に照らされて  
 已能雖破無明闇 無明の闇は晴れぬれど  
 貧愛瞋嫌之雲霧 ほしいにくいの雲霧が  
 常覆清浄信心天 いつも湧き出て曇るなり  
 譬喻如日月星宿 たとえ雲きり覆うとも

### 修

離覆烟霞雲霧等 光は徹り貫きて  
 其雲霧下明無闇 再びやみとならぬなり  
 信知超日月光益 月日に超えし利益かな  
 △ 現 当 信 益  
 必至無上淨信曉 無上の信をたまわりて  
 三有生死之雲晴 迷いの雲は晴れわたり  
 清淨無碍光耀朗 ドコ／＼までも見捨てぬと  
 一如法界真身頭 ほとけは我にやどります  
 発修称名光摂護 たゞ念仏の氣樂さに  
 亦獲現生無量徳 現世無量の徳をとる  
 無辺難思光不断 無限の慈悲のみほとけは  
 更無隔時処諸縁 いつもどこでも離れずに  
 諸仏護念真莫疑 守り護りてたまわると  
 十方同称讚悦可 諸仏菩薩の御称讚  
 惑染逆惡齊皆生 善きも悪しきも隔てなし  
 謗法闍提廻皆往 反逆無信も廻心せよ  
 積 迦 章  
 当来之世経道滅 すべての教ほろぶとも  
 特留此経住百歳 他力念仏栄えなん  
 如何疑惑斯大願 超世の願を聞くべしと  
 唯信积迦如実言 积迦は経にぞ説きたまふ

依 釈 段

印度西天之論家  
中夏日域之高僧  
開大聖世雄正意  
如來本誓明應機  
支那日本の五高僧  
釈迦の経意を信知して  
弥陀の大悲を書き示す

竜 樹 章

釈迦如來楞伽山  
為衆告命南天竺  
竜樹菩薩興出世  
悉能摧破有無見  
宣說大乘無上法  
証歡喜地生安樂  
造十住毘婆娑論  
難行峻路持悲憐  
易往大道広開示  
応以恭敬心執持  
称名号疾得不退  
信心清淨即見仏

天 親 章

天親菩薩作論説

天親菩薩は論つくり

必到無量光明土  
諸有衆生皆普化

光明無量の国に往き  
縁ある者を教化せん

道 綽 章

道綽決聖道難証  
唯明淨土可通入  
万善自力貶勤修  
円満徳号勸専称  
三不三信誨慙  
像末法滅同悲引  
一生造惡遇弘誓  
至安養界証妙果

善 導 章

善導独明仏正意  
深籍本願興真実  
衿哀定散与逆惡  
光明名号示因縁  
入涅槃門值真心  
必獲於信喜悟忍  
識生人得難思往  
即証法性之常樂

源 信 章

源信広開一代教

源信一切経を読み

源信の傳

総 讀

別 讀

依修多羅顯真実

お経の心書き遺し

光闡横超本弘誓

一足飛びに証りうる

演暢不可思議願

不思議の願を演べ給う

由本願力廻向故

凡愚済度の願を聞き

為度具縛彰一心

只有難やのひとおもい

皈入功德大室海

南無阿弥陀仏の功德にて

必獲入大会衆数

菩薩の仲間に入れ給う

得至蓮華藏世界

極樂淨土に生れなば

即証寂滅平等身

ほとけのさとひらくなり

遊煩惱林現神通

煩惱満てる世の人の

入生死園示応化

迷苦を救い導かん

曇 鸞 章

曇鸞大師梁蕭王  
常向鸞方菩薩礼  
三蔵流支援淨教  
焚燒仙經販樂邦  
天親菩薩論註解  
如來本願顯称名  
往還廻向由本誓  
煩惱成就凡夫人  
信心開発即獲忍  
証知生死即涅槃

曇鸞大師は梁王に  
弥陀の本願説きたまう  
三蔵流支は念仏を  
長生不死と教えけり  
淨土論をば註釈し  
弥陀本願は唯念仏  
往還二種の御廻向で  
煩惱五濁の世の人が  
信じ称うる念仏に  
苦海を弘誓の船に乗り

偏帰安養勸一切

本願信じ勧めます

依諸経論釈教行

経の念仏えらびとり

誠是為濁世目足

濁世の目足これのみぞ

決判得失於專雜

専修と雜修を判けたまひ

廻入念仏真実門

念仏真実の門に入れ

唯定淺深於執心

淺き深きの心より

報化二土正弁立

眞仮の果報あらわるる

源 空 章

源空曉了諸聖典

源空聖人学深く

憐愍善惡凡夫人

善惡凡夫を憐みて

真宗教証興片州

真宗教証説きたまう

撰撰本願施独世

濁世の人は弥陀たのめ

還來生死流転家

生死流転に迷う身は

決以疑情為所止

念仏眼かぬ人ぞかし

速入寂靜無為樂

寂靜無為のみやこには

必以信心為能入

他力念仏の人うまる

結 勸

論說師釈共同心  
拯済無辺極濁惡  
道俗時衆皆悉共  
唯可信斯高僧説

高僧知識は皆ともに  
濁惡邪見を救い正す  
いかなる人もみなともに  
真宗教証信すべし

昭和三十三年、五月。

あとがき

暑さもようやく峠を越えて虫の音の涼しい九月に入りました。草も木もみのりをむかえて空も澄んで参りましたこの秋、草木と共に我身のみのりの秋を迎えましょう。慈光誌も百五十号をお送り出来ました。上は如来聖人をはじめ、諸先生方、読者の皆様方の御念力に支えられて参りました。

近角先生御著書紹介

人生と信仰 定価百八十円送料四十円

第一章 人生問題と信仰 第二章 悲観思想と信仰 第三章 倫理力行と信仰 第四章 犯罪心理と信仰 第五章 社会問題と信仰 第六章 国家秩序と信仰 第七章 世界宇宙と信仰  
以上七章に分け、人生の各方面から信味を注がれたものであります。先生は常に紙がなくて字も画も描けぬ。人生問題の紙の上に信仰問題を味うことが大切であると申されました。

慈愛と信実 定価百二十円送料三十円

一、はしがき 二、告白  
三、永却の親 四、如来の聖行  
五、如来の親心 六、絶対の直衷

七、罪惡の自覚 八、相對の善惡  
九、信樂開發 十、如来の廻向  
十一、四海兄弟 十二、秩序法則  
十三、逆惡救済 十四、慚愧懺悔  
十五、往相と還相  
と十五条になつております。真宗信仰の要諦が述べてあります。信の旅のよき伴侶であります。

福島先生御著書紹介

歎異抄身誌記 定価百八十円送料四十円

先生序に  
「此の小著は私が仰いて信ずる心から私自身の体験を書き記したものであります。「我が懺悔」ともいうべきものであります。私は仏陀の前で独り言をいうような心持でこれを書き、併しまことの救いを求める世の人々の御前に獻げたいと思つてあります。」「歎異抄身誌記」と申しますのは、私が身を以て私の全生活の上に「歎異抄」の深いところを味わつて参りました筋道を書きましたからであります……」  
とありますので内容を推知して下さい。

以上三書ともに、京都市下京区油小路通六条南入ル丁子屋書店(振替、京都一四五〇番)で発売。慈光社でも取り次ぎいたします。

御案内

九月より、毎月第一、第二、第三日曜日  
午後一時半、一道会館、日曜講話。

毎月廿四、昭和区小桜町、教西寺、午前  
午後、法話会。

九月廿七日碧海郡六ツ美町上三ツ木、太  
田氏宅。台風追吊会。午前、午后。

定価	一部	二十五円(送共)
	半年	百五十円(送共)
	一年	三百円(送共)
編集・発行人	花田正夫	
印刷	人本	田政雄
發行所	慈光社	
振替口座	名古屋一〇四七〇番	

慈光第十三卷 第九号 昭和三十六年  
昭和二十四年七月二日

九月十五日 發行(毎月一回十五日發行)  
第三種 郵便物認可